

風を起こす

<第37回>

ガッツのない奴に栄光はない！

北九州市産業経済局 観光にぎわい部 観光課長
兼フィルム・コミッション担当課長

日々谷 健司さん

明治以降、官営八幡製鐵所を中心に発展を遂げてきた鉄の街、北九州市。鉄冷え、文化砂漠、通過都市といったマイナスイメージを塗り替えるべく、「映画の街」という新たな都市ブランドを確立させている。

業界人とやらに、私になります

『図書館戦争』では美術館内での銃撃戦、『交渉人 THE MOVIE』では空港でのハイジャック、『MOZU』では繁華街での爆弾テロ。映画の見どころとなるこれらのシーンは、すべて北九州市がロケ地となっている。「日本では撮れない」と言われてきた撮影を、北九州フィルム・コミッション(FCC)ではいくつも実現させてきた。「困ったら北九州へ行け」——業界ではそんな言葉も囁かれるほど頼りにされている。

その北九州FCCでスタッフから「ボス」と

呼ばれていたのが、現・北九州市観光課長の日々谷健司さんである。2000年4月、広報室報道課イメージアップ班(北九州FCCの前身)に異動して以来、2015年3月までの15年間、北九州FCCを率いてきた。「イメージアップ班は1989年、メディアを活用して市のイメージアップを図ることを目的に発足した部署です。当初は映画やドラマより旅番組や情報番組が中心だったようです」映画やドラマとなると、東京から1000kmも離れている北九州市は圧倒的に不利。それでも、市では映画やドラマのロケ誘致に力を入れていこうと、2000年10月、FCCを立ち上げるようになった。FCC創設にあた



【ひびたに・けんじ】1967年福岡県水巻町出身。1989年北九州市入庁。教育委員会中央図書館奉仕課を皮切りに、港湾局のポートセールス業務、総務局の議会担当業務などを経て、2000年広報室報道課イメージアップ班フィルムコミッション担当に。映画界に強固なネットワークを築き、180本以上の映画とドラマを誘致・支援してきた。2002年AFCI認定国際フィルムコミッション資格取得。特定非営利活動法人ジャパン・フィルムコミッション副理事長兼事務局長も務める。

り、当時の市長からは「あの業界と渡り合うには公務員では難しい。業界人を雇ったほうがいいのではないか」との意見が出された。だが、日々谷さんは「その業界人とやらに私になるから心配ない」と言い切った。だからと言って、映画製作の知識があるわけでも、業界との人脈を持っているわけでもない。

「まずは北九州市のオンリー1、ナンバー1を探るため、他都市のロケ地を片っ端から調

市内で行われた撮影の様子



査しました。その結果見えてきたのが、市内に残る「昭和の街並み」です」

全国的に古い街並みが姿を消していく中、北九州市には昭和の香り漂う街並みが点在していた。日々谷さんは、そこを売っていいかと考えたのだ。

初めて誘致した作品はテレビドラマではあったが、撮影にやつて来たのは監督をはじめ映画のスタッフだった。準備期間も含めて約1カ月間、日々谷さんは彼らに張り付き、寝食を共にした。夜になれば、制作部、照明部、録音部など各部を回って、酒を酌み交わした。映画業界はどんな仕組みで、作品はどんな流れで作られ、各スタッフはどんな役割を担っているのか。映画製作のイロハを日々谷さんは「生きた教科書」から学んだ。「ロケ地は何を求めているのか」——懐に飛び込むこと

で、彼らの本音を探ることもできた。そうして築き上げた人間関係が足がかりとなり、北九州FCにとって初となる映画のロケ誘致につながった。

「映画業界は意外と狭い世界で、横のつながりが強いんです。だから、ロケを通してケンカしながらでも全力でいい仕事をすれば、そこから人脈を広げていくことができる」

要は、やるか、やらないか

映画のロケ地は、作品のイメージや都心からの移動時間など幾つもの要素を考慮して決定される。「ロケ誘致のカギは、いかに早い段階で情報を手に入れ、いかに早く柔軟に動くか」——日々谷さんのその戦略が成功した一例が、映画『おっぱいバレー』（綾瀬はるか主演）だった。

『おっぱいバレー』は、弱小の男子バレー部に所属する中学生たちが、新任の女性教師の登場によって成長していくという青春ストーリー。原作である小説の舞台は「現代の静岡県」だったが、監督はインターネットがない昭和50年代の設定を考えていた。監督と旧知の仲となっていたため、その情報をいち早く入手した日々谷さんは「時代設定が変わるなら舞台設定も変わっていいだろう」と勝手に解釈して、昭和50年代の北九州市の設定でロケハン（ロケ地探し）を始めた。

同時に教育委員会と交渉して「市内全ての中学校でロケOK」を取り付けて制作会

社に提案した。実際、制作サイドは『おっぱいバレー』というタイトルの映画に協力してくれる教育委員会があるのか不安を抱えていただけに、この提案は大きかった。

結果、まだ台本もできていない段階で、他都市のFCが誘致のスタートラインに立つ前に、オール北九州ロケが決定した。

だが、次なる難問が待ち構えていた。それは「交通量が多い駅前ごきょうの五叉路を丸1日封鎖する」ことだった。チンチン電車が走る駅前の風景は、時代背景を印象づける重要なシーン。しかも、昭和50年代の車が走り回るシーンのため、道路封鎖は避けられない。

「警察が封鎖に難色を示す理由は何かと言えば、地元の方から苦情が入ることです。だったら苦情が入らないようにすればいいんじゃないかと。地元の町内会や商店街の役員さんたちに集まってもらって、皆でお祭りをやりましょう！」昭和50年代の恰好をして、街の皆で楽しめようよと持ち掛けました」日々谷さんの熱い想いが心を動かし、町内会と商店街の会長が連名で、警察署に対し街の封鎖を要望する請願書を出してくれた。FCとしても入念な迂回計画と告知計画を策定し、警察署に道路使用許可を申請した。その他、ロケ地となる市内28カ所すべての使用許可申請から、延べ4000名に上るエキストラの手配、キャストとスタッフの宿泊先の確保、レンタカーやケータリングの手配までかゆいところに手が届くサポートで、40日間にわたる撮影は無事終了した。

『MOZU』の爆弾テロ事件シーンのロケ地となった老舗デパート「井筒屋」前。



撮影を見守る日々谷さん。ジャンパーのバックにプリントされた北九州FCのロゴも、永ちゃんぽくでROCKを感じる



完成した作品は全国公開された。「僕中学校は、うなぎとスッポンで有名な浜名湖に近い小さな街にある」で始まる小説が、映画の予告編では冒頭で「1979年、北九州市」の文字が映し出される。『おっぱいバレー』は北九州市のご当地映画となった。

「不可能なんてない。できない要因を1つずつ潰していけば、大抵のことはできるんです。要は、やるか、やらないか。北九州市は黙っていてもロケが来るまちではない。だから、他の大都市ではできないような街なかでの大規模ロケや危険なロケにチャレンジしよう」と、覚悟を決めて取り組むことにしました」

怖いからこそ、準備は入念に

「大規模ロケ」は北九州FCの大きな売りの一つである。地上波放送と衛星放送の共同

制作で話題を呼んだサスペンス刑事ドラマ

『MOZU』では、監督から「向こう10年、誰も真似できないような作品にしたい」と相談を受けた。東京・銀座で起きる爆弾テロ事件のロケ地選定にあたっては、日々谷さんのほうから市内随一の繁華街での撮影にチャレンジさせてくれないかと提案した。それは自らの首を締めることに等しい。

繁華街での爆破シーンとなれば、何もないとは言い切れない。普通だったら、ロケ自体丁重にお断りするところだが、あろうことが日々谷さんはハードルを上げた。

「どこもやらないド派手なロケには、リスクが伴います。ですが、成功させれば映画界から一置かれる存在になり、ロケも増えていく」

それは勝負でもあった。往来が激しい繁華街を6日間封鎖するため、老舗デパートや周辺店舗、事業所など関係者を説得して回り、

国内では不可能と言われていた街なか爆破ロケを実現させた。作り物のセットでは表現できないリアルな街で撮った迫力ある爆破シーンは、観る者に強烈なインパクトを与えた。

『MOZU』の撮影に街を挙げて協力したことが評価され、2014年、北九州FCはFCとして全国初となる「東京ドラマアウォード特別賞」を受賞した。授賞式の壇上に登った藤原通孝^{みちたか}副市長(当時)は「これからも前例や慣例的なタブーに臆することなく挑戦を続けていく」と宣言した。司会者は「これが市役所の言葉ですか!」と叫び、会場に大きなどよめきが起こる中、日々谷さんは1人でスタンディングオベーションを送った。

「当時は、むしろくちや高い所で綱渡りしているようでした。しかも全力疾走で。今思えば怖いですね。僕は豪快なイメージで見られるんですが、基本的にビビりなんです。だからこそ、誰よりも準備はしっかりします」

例えば『おっぱいバレー』での、校庭に全校生徒を集めた朝礼シーン。撮影は真夏の一番暑い時期に行われたが、4月の設定であるため生徒役のエキストラも全員冬服を着なければならなかった。「熱中症で倒れさせてはいけない」と思った日々谷さんは、救急救命士の待機はもとより、FCのスタッフ全員にジャンパーを着用させた。エキストラと同じ状態を共有することで、早めの対処をするためだ。

「FCスタッフには、生徒たちの目を見て、表情を見て、異変を察知しただすぐに連れ出せと。FCが撮影を止めてもかまわないと指

「東京ドラマアワード特別賞」受賞式にて（右端が日々谷さん）



示していました」

それは撮影中、エキストラとして参加する市民のほうを向いているということだ。

「FCは言わば、地域の番長」です。東京から来た制作スタッフに、北九州のことは俺に任せろ」と勝手知らざる土地で自由な撮影ができる環境を整える。でも、撮影が始まれば、撮影行為から市民の生命と財産、プライバシーを全力で守る。それが番長の責務です」

長時間に及ぶことが多い撮影中も、市民への目配り、気配りを欠かさない。

「市民の皆さんには、楽しかったと思って帰ってもらいたいですよ。幸い、北九州市民は祭り好きの気質で協力的な人が多く、撮影も、祭り」と捉えて一緒に楽しんでくれるので助かっています」

参加した市民からは「何気ない風景や街並みが、見方によって映画のワンシーンになるこ

とに気づかされた」「北九州市民であることを誇りに思った」といった声が寄せられている。ロケ誘致は経済効果やイメージアップだけでなく、郷土愛の醸成にもつながったのだ。

市民エキストラとして現在約7000人が登録しているが、一度に数千人のエキストラを集められることも北九州FCの強みの一つ。「ハリウッド並みの大規模ロケ」「制作スタッフも驚くレスポンスの早さ」「24時間体制でのきめ細やかなサポート」など従来の役所のイメージを覆す手法で、東京から1000kmというハンディを乗り越えている。

大事なことは全部、永ちゃんに学んだ

2015年4月、観光課長となった日々谷さんは、FCで培った経験や人脈をフルに活用し、観光政策に手腕を振るっている。もともと工業都市であった北九州市には「観光で食べていく」という発想がなかった。本格的に観光に取り組んでまだ20数年で、特に海外では観光地としての知名度も低い。

「知名度を上げるには、メディア戦略が重要。それには何と言ってもドラマと映画が効果的です。北九州FCでは最近、タイのドラマ誘致に力を入れているので、これに合わせて観光PRも行っています」

FCの機能や成果を活かしていくことが、全国的にも大きな課題と言われている。「観光地や特産品、地元企業の製品等を映像に露出させて、出演タレントや対象国の関係

者と組むことにより、観光振興や特産品の販売ルート確立、企業PRにつながっていきます。FCの可能性は大きい」

今、北九州FCでは日々谷さんのスピリットを引き継いだスタッフが、さらに高みを目指して新たなチャレンジを続けている。座右の銘は「No Guits No Glory. Go for it. (ガッツのない奴に栄光はない。やってみろ)」。

日々谷さんが入庁したのは、北九州FCの前身である広報室イメージアップ班が発足した1989年。最初の配属先は教育委員会で、移動図書館業務を担当した。港湾局振興課では、未だ閑散としていた門司港で数々のイベントを手掛けた。総務局総務課議会係では議会対策に奔走した。「すべては信頼関係」と気づき、「最初から自分をさらけ出して、正直にぶつかっていく」という姿勢は、ロケ誘致でも生かされた。

「物心ついた頃から熱狂的な矢沢永吉のファンで、大事なことは全部、永ちゃんが教えてくれました」

大風呂敷を広げ、自分にプレッシャーをかけて、やり切ってしまうという仕事のやり方も永ちゃん譲り。趣味は愛車ハーレーに乗ることというから、筋金入りである。

学生時代はかなりやんちゃだった。高校卒業後は夜の世界で働いていたが、付き合っていた女性との結婚を相手の親に認めてもらうため、一念発起し公務員を目指した。その生き様もまた、映画のようにドラマティックなのである。

（取材／ライター 更田沙良）